

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32518

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23135

研究課題名(和文) 現代中国の「代耕農」現象にみる移動のハビトゥスの民族誌的研究

研究課題名(英文) Habitus of Mobility: An Ethnographic Study of the Phenomenon of "Daigengnong" in Contemporary China

研究代表者

川瀬 由高 (KAWASE, YOSHITAKA)

江戸川大学・社会学部・講師

研究者番号：60845543

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代中国農村の「代耕農」即ち出稼ぎ農業従事者たちを対象とし、その生存戦略としての頻繁かつ柔軟な移動実践、及びそのような実践を可能にする社会的条件の探求を目標とした。コロナ禍の影響により代耕農に関する現地調査は十分に行えなかったが、これまでの調査資料の分析および文献研究を通して、中国人社会における「よそ者」との邂逅や非共同体的な社会関係に見られる独特な身構え(ハビトゥス)をつらぬく社会的力学を考察し、さらに研究史上の伏流であった「非集団論」の系譜とその意義を明らかにした。本研究成果の一端は、単著『共同体なき社会の韻律』(弘文堂、2019年)の他、複数の論文(分担執筆等)として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、等身大の中国人社会の姿を理解し記述するためのより適切な視点の構築を、中国農村社会の対人関係のありように注目しながら試みたものである。そこでは日本のような「共同体」は無く、ウチ/ソトの境界は状況に応じて可変的で、時には「よそ者」との協同も見られる。そのような社会生活の姿を捉えるためには、固定的な境界や成員権を前提とする発想を相対化した「非集団論」の考え方が有効であることを指摘した。粗雑な「嫌中」論が飛び交う今日の実状を見るにつけ、残念ながら言うべきであるが、異文化理解の倫理の醸造は重要性を増している。本研究は、日本における中国の社会文化の理解の成熟の一助を担うものと位置づけられる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on "Daigengnong", or migrant farmers, in contemporary rural China, with the aim of exploring frequent and flexible mobile practices of them as a survival strategy and the social conditions that make such practices possible. Due to the impact of the corona disaster, I was not able to conduct sufficient field research on Daigengnong. However, through the analysis of my previous research materials and previous studies, I have examined the social dynamics underlying the peculiar posture (habitus) found in the way of interacting with outsiders and in non-communal social relations in Chinese society. Furthermore, I clarified the genealogy and significance of "non-group theory," which has not been sufficiently recognized in the history of ethnographical research of Chinese society. Some of the results of this research were published in the single-authored book 'The Prosody of Society Without Community' (Kobundo, 2019), as well as in several articles.

研究分野：文化人類学

キーワード：非集団論 差序格局 非境界の世界 移動 ハビトゥス 代耕農 共同体なき社会 韻律

1. 研究開始当初の背景

本研究は、筆者が2018年度から着手した研究課題（JSPS-18J01394、「中国江南農村の存立形態にみる韻律的コモナリティの研究」）を継続・発展させる形で展開するものであった。当該研究課題で焦点をあてたのが、現代中国の農業従事者の構造変化を象徴する「代耕農」と呼ばれる人々である。

「代耕農」とは中国周辺部の郷里を離れ、より豊かな地域の農村へと移動し、在地農民に代わって耕作を行う農民である〔黄 2013〕。膨大な先行研究の蓄積〔e.g. 周 2005〕がある「農民工」（農村から都市への出稼ぎ労働者）との対照で言えば、「農民農」と形容できるかれら代耕農の流入現象については、これまで実地調査に基づく質的研究は殆どなされてこなかったのが現状である。しかしながら、もはや代耕農なしには農業が成立しえない今日の中国農村の存立形態を理解するには、代耕農という「よそ者」への視座が不可欠である。

上記のような中国農村地帯の現状を把握する上では、近年の新たな「移動論」が有益な視座を提供している。たとえば社会学者ジョン・アーリは、グローバル化の進展による世界規模での流動性の高まりやモバイル機器の発達を背景に、社会学における移動論的転回（mobility turn）が勃興していると指摘している〔アーリ 2013〕。この議論は、従来までの定住者中心主義的枠組みを相対化させ、「移動」を主語にすえた研究視座を提供する点で魅力的であり、多様な出自をもった人々が交差した現代中国農村社会を考える上で示唆的な議論となっている。しかし、グローバル化を画期とした社会変動（低い/高いモビリティ）という理解を維持している点で、往年の近代化論（そして近年の個人化論あるいはコミュニティの崩壊論〔e.g. Yan 2009; Hansen & Svarverud (eds.) 2010〕）と同様に、「それ以前/以後」とを非連続的かつ対比的に描いてしまうという問題点が残る。

このような袋小路を回避しつつ、独創的かつ先鋭的な議論を展開してきたのが堀内正樹を中心とした日本の中東研究者らであり、彼らが提唱する「非境界の世界論」である〔堀内 2015; 池田 2018; 斎藤 2018〕。彼らによれば、文明語（アラビア語・漢語・ラテン語）を有する社会においては、長い歴史のなかで多様な属性・生業・民族・宗教の人々が移動と離合集散を繰り返しており、それゆえ、人々は移動および文化的背景の異なる他者との邂逅をごく当たり前のものとしているのだった（織り込み済みの偶発性）。

イスラーム世界における人々の移動や生活は、境界や成員権を持つ集団（group）の発想では理解できない。この知見は、かつて費孝通〔1948〕が中国の社会構造として示した「差序格局」の発想（人々の集合体とは水面に石を投げ入れた時の波紋のようなものだ）に呼応する点で非常に示唆的である。中東の人々と同じく、中国でも人々は歴史上一貫して移動を常態としてきた。そして他者との邂逅の際、境界は水面上の波紋のように揺れ動く。即ち、人々は「よそ者」との邂逅に対する身構えを培ってきたのであり、そしてそれは社会動乱等の要因のために移動が常態であった文明社会におけるある種の生存戦略なのだといえらる。

2. 研究の目的

以上の理論的知見を踏まえ、本研究では「代耕農」現象に関する民族誌調査に基づき、現行の統計調査からは零れ落ちているかれら「よそ者」らの頻繁かつ柔軟な移動実践の等身大の姿を、新たに「移動のハビトゥス」と概念化し記述する。これにより、流動的な農業従事者らの生存戦略を歴史的な時間幅のなかで捉えなおすとともに、現代中国の農業生産量、ひいては社会的分業体制および経済構造を下支えする移動現象の力学を明らかにすることが、本研究の目標である。

3. 研究の方法

本研究では、代耕農の出現と定着を歴史的な文脈のなかで理解することを目標とした文献研究、「移動のハビトゥス」を論じるための新たな理論枠組みの検討、江南地方各地の農村を後背地として進展した代耕農現象に関する現地調査を行うことで、上記の研究目的の達成を目指した。

だが、2020年初頭から続くコロナ禍の影響により、2021～22年度には、当初計画していたフィールドワークは実施がかなわなかった。そこで本研究では、文献研究を主軸とした研究を進めることで、中国に見られる、軽やかに展開される柔軟な移動実践と他者との邂逅を論じるための理論的枠組みの構築に取り組んだ。これまでの現地調査データの再分析や、古典的先行研究の再検討に注力したことにより、以下に記すような新たな知見を得ることができた。

4. 研究成果

(1) 「代耕農」の後背地における新たな変化と伝統社会におけるモビリティとの共通性の確認

2019年度に実施した南京市郊外の高淳区での現地調査からは、新たなタイプの「代耕農」現象が確認できた。2000年代～2010年代前半にかけて「代耕農」の送り出し社会となってきた同地域の農村では、現在、他地域からの「よそ者」の流入が目立ち始めている。しかもそれは、現地の農業従事者の高齢化と耕作の放棄の増加を背景に、農地をつぶし水産品の養殖池へと転換

するという抜本的な変革を伴ったものでもあった。

この点に関しては、伝統社会におけるモビリティの問題との共通性が見られることを文献研究からは確認することもできた。すなわち、代耕農現象を生み出した中国の土地制度の変革と土地所有権の貸与の活性化という現代的現象は、前近代の江南社会における「田底権と田面権」の分離と社会的流動性の関係という歴史学的テーマと軌を一にするのである〔菅 2004〕。

(2) 「共同体なき社会」「韻律」「差序格局」をめぐる理論的研究とその成果発表

2019年度には、研究成果公開促進費（JSPS-19HP5110）の助成を得て、著書『共同体なき社会の韻律』を刊行した。本書は中国人社会にみられる特有の柔軟性や、農村という社会空間の非共同体的性格を日常的な生活場面をもとに描くことを試みた民族誌であり、本研究課題の理論的枠組みの面でも着実な進展があったと言える。

さらに、本研究成果の一部内容を一般読者に向けて紹介する試みとして、Podcast「ブック・ラウンジ・アカデミア」においてインタビューを配信するとともに、嗜好品をめぐる論考を『季刊民族学』にて発表した。

(3) 「移動」「非集団論」をめぐる理論的研究とその成果発表

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受け、2020年度、2021年度においては、現地調査を行うことができなかった。そこで、本研究課題のキーワードである「差序格局」「移動」「非集団論」などに関する理論的研究に力を入れ、その成果を、学会報告や、書評の投稿、論文集（分担執筆）の出版として発表してきた。

とくに、2021年9月に発表した書評では、現代中国における他者との邂逅を題材に、「差序格局」概念の適応可能性について新たな問題提起を為すことができた。また、2021年12月に公刊した中国語図書（分担執筆）においては、先行研究における学説史理解では十分に焦点化・主題化されてこなかった諸研究を「非集団論」という枠組みで捉えなおすことを試みた。この研究過程では、中国人の社会関係の特質をめぐる王崧興〔1987〕の「関係あり、組織なし」テーゼの意義を再確認するとともに、その議論の母体となった古典的民族誌『龜山島』〔王 1967〕の再評価の必要性を見出した。なおこの研究課題については、現在、共同研究に着手しており、2023年度には邦訳書を刊行する予定である。

(4) 中国に関する異文化理解を論じた教科書（分担執筆）の公刊

上記(2)(3)の研究過程では、中国に関する異文化理解を論じた文化人類学分野の教科書（分担執筆）の出版にも寄与し、2冊を刊行することができた。

参考文献

- 費孝通 1948 『郷土中国』 観察社。
黄志輝 2013 『無相支配：代耕農及基底層世界』 社会科学文献出版社。
王崧興 1967 『龜山島：漢人漁村社会之研究』 中央研究院民族學研究所專刊之十三，中央研究院民族學研究所。
周大鳴 2005 『渴望生存：農民工流動的人類学考察』 中山大学出版社。
Hansen, M.H. & R. Svarverud (eds.) 2010 *iChina: The Rise of the Individual in Modern Chinese Society*. NIAS Press.
Yan, Yunxiang 2009 *The Individualization of Chinese Society*. Berg.
アーリ、ジョン 2015 『モビリティーズ：移動の社会学』 吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社。
池田昭光 2018 『流れをよそおう：レバノンにおける相互行為の人類学』 春風社。
王崧興 1987 「漢人の家族と社会」伊藤亜人・関本照夫・船曳建夫編『現代の社会人類学Ⅰ 親族と社会の構造』 東京大学出版会 pp.25-42。
齋藤剛 2018 『移動社会 のなかのイスラーム：モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』 昭和堂。
菅豊 2004 「中国における近世的土地資源利用：上海市松江地区の事例から」自然資源の認知と加工班編『研究彙報 6（資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築：象徴系と生態系の連関をとおして）』 pp.25-35。
堀内正樹 2015 「まえがき」堀内正樹・西尾哲夫編『断と続の中東：非境界的世界を遊ぶ』 悠書館 pp. iii-xxi。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 川瀬由高	4. 巻 180
2. 論文標題 「粽が好きな人びと」（特集 嗜好品 つくる・映える・やみつきになる）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『季刊民族学』	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川瀬由高	4. 巻 86(2)
2. 論文標題 「書評 費孝通著 西澤治彦訳『郷土中国』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 336-339
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.86.2_336	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川瀬由高	4. 巻 11
2. 論文標題 「書評 堀江未央著『娘たちのいない村 ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『コンタクト・ゾーン』	6. 最初と最後の頁 498-504
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 川瀬由高
2. 発表標題 「イスを勧める、イスに坐る 中国南京市郊外農村における日常的社交と歓待の作法」（分科会：歓待のエスノグラフィ）
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川瀬由高
2. 発表標題 “没有共同体的社会”の人類学 從蘇南農村到中東“非边界性世界”の理路
3. 学会等名 中日人類学学术交流研討会（於：北京・中央民族大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川瀬由高
2. 発表標題 未成道男與客家研究 祭祀圈論の更新與非集團論の起步
3. 学会等名 「百年往返：台灣與日本客家研究之對話」國際研討會（於：台灣・國立交通大學國際客家研究中心）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 簡美玲・河合洋尚（共編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 苗栗：客家文化發展中心	5. 総ページ数 384ページ
3. 書名 『百年往返：走訪客家地區的日本學者』（分担執筆：第9章）	

1. 著者名 土屋薫・阿南透・大塚良治・川瀬由高・佐藤秀樹（共編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 224ページ
3. 書名 『現場に立つから、おもしろい 世界をつなぐ、ひと・モノ・しくみ』（分担執筆：第1章）	

1. 著者名 桑山敬己（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 354ページ
3. 書名 『人類学者は異文化をどう体験したか 16のフィールドから』（分担執筆：第3章）	

1. 著者名 川瀬由高	4. 発行年 2019年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 306ページ
3. 書名 『共同体なき社会の韻律』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>『共同体なき社会の韻律』著者 川瀬由高さんインタビュー https://www.bookloungeacademia.com/127/ 現代社会学科・川瀬由高講師の共著が台湾で出版 https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20220310_1.html 現代社会学科・川瀬由高講師の共著『人類学者は異文化をどう体験したか』が出版 https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20210429_1.html 現代社会学科・川瀬由高講師の単著『共同体なき社会の韻律』が出版 https://www.edogawa-u.ac.jp/news/20191223_1.html</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------